地方博物館の建設プランニング ----その実際的アドバイス----

Practical Advices on Community Museum Planning

小島 弘 義 Kojima Hiroyoshi*

Recently there is a trend for constructing museums in various parts of Japan. However, construction plans of most of these museums, whether constructed by prefectural authorities or city authorities, have been principally prepared by architecturers or designers and experiences or advices of experts and specialists in the field are employed only as information sources.

Another feature in these plans is that the most emphasis is placed on art works, particularly on antique arts. Consequently, museums featuring geographical peculiarities or cultural heritage of specific localities are rarely found.

For the past 5 years the writer has been taking charge of a construction plan of a city museum to be opened for public in May this year.

The basic purpose of this museum is to provide a new type of community museum which will serve as an academy for the residents of the community concerned. It will have a different image from that of a historical museum in Japan (where al kinds of articles are exhibited without any principle or order).

Having such objective, the committee members for the construction of the museum have made very bold attempts even from the initial stage of the planning so that the museum will provide unique and educational projects.

The members have made every possible effort in planning of organization and activities of the museum and paid particular attentions on the manner of display which will serve as the official stage of the museum for the public.

The members have compiled various drawings and documents related to the processes of planning through completion of the building. It is our sincere hope that similar efforts will be made by others in construction of other museums.

The article presented here consists of 7 sections; namely, I. Introduction, II. Role of Community Museum, III. Construction Planning, IV. Hiratsuka City Museum Plan, V. Construction Plan and Execution of Construction of the Museum, VI. Future Construction. Plans and VII. Conclusion.

I はじめに

昭和40年代になって、高度経済成長や明治 100 年を迎え、文化的ゆとりから各地に博物館建設ブームを呼び、なかでも県単位の大型博物館が各地に誕生し、市町村でも年々増加の傾向にある。しかしながら建設プロセスが

きちんとまとめて発表されている館は非常に少ないのが 実状である.

筆者も建築プランニング過程で博物館学的文献を探してみたが、館職員のレポートは皆無に等しかった. 建築設計家が美術館を中心にしたものは、「建築学大系」「建

築設計資料集成」があるだけであった。また ICOM の「博物館組織」にしても全体的プランニングには役立たないし、日本の実状とかけ離れていることも多い。

このような現状から、日本の博物館はある意味において建築設計家のイメージ的立案にゆだねられてきた面が多い。一方博物館側には、資料調査研究とは異なる技術的な面で、知識と経験を持つ学芸員の力不足も大きな理由であろう。そのため、いざ造ろうといっても、どのような博物館を、どういうブロセスで造ろうかという指針もなく、日本の各地に博物館が誕生していくことに非常に危険を感じている一人として、体験をまじえながら記してみた次第である。

このような建築的なことに学芸員の側からレポートが 少ないということは、行政の中にあって県・市あたりの 博物館の建設にはほとんど学芸員クラスの人間が参加で きないような組織であったり、何をどうやるのか知らな いでできてしまうケースも多いと聞く.

筆者も過去6年間調査・収集・展示・設計にあたって 学芸員の夢を実現すべく大きな時間を費やし、行政の中 にあってその組織の中に埋没しそうであったが、生涯自 分の勤める館を少しでも使いやすくしたいという一念で ついに完成までこぎつけた。しかしその間、建築設計に 時間を費やす位なら、資料でも集めた方がましではない かと、いろいろな博物館人からのアドバイスもあった。 またふり返ってみても、なまじのことでは図面も見れず おざなりな館に終わってしまったとも思う。

数多くの新設館の学芸員から設計家が勝手に造って学

芸員には関係ないし、使いずらいという意見を良く聞かされてきた。 建築家が館を使うわけでも運営するわけでもないのだから、今後は学芸員と一体になって造ってほしいと思う。 また、若い学芸員を養成する側でも、もっとその面の配慮をされるよう念ずる次第である。

一地域博物館の建築プランの体験をもとに,具体的に 資料を整理して,少しでも今後の館の新設に役立てば望 外の幸せである。また新設なった各地の博物館も,博物 館学的見地から博物館の建築設計を再検討し,博物館設 計に新しいメスを入れてもいい時期と思う。昨年の一級 建築士の国家試験でも,地方博物館の設計が出題された が,この際博物館人側からも吟味した意見が出される時 期でもあろう。

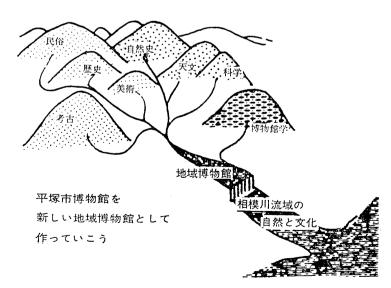
Ⅱ 地域博物館とは何か

近年造られた館を分野的にみても、総合博物館は県立 博物館クラスでも非常に少なく地方博物館では、47・48 の2年度でも公立約29館中歴史系20館、美術館2館、総 合はたった3館しかない実状からも、いかに歴史系の専 門館的色合いが濃いからかがえよう。

一般的には全国の博物館群構想においては国立総合 一県立総合 市立専門という概念が正しいようにみえる。そのため、美術館・民俗館・考古館という形で造られるケースが一般的であり、その方がよく利用されるのではないかという。

しかし人間生活から考えても,自然と人間は切っても切れない関係であり,非常に深くからみあら中にある.

図 1 新しい地域博物館をめざして



この図は展示シナリオ用に考えたものであるが、建設調在委員の山本 借一 氏の「家政学」の考え方の図を参考とし、小島のラフ図を 浜口哲一氏が清書したものである (1974・5)

しかも、初めて1つの町に博物館を造ろうというとき、専門的に1つだけの内容では、どうしても地域住民のごく一部の人の希望をかなえるか、各地の専門家を対象とした館になりがちで、地域住民の各年齢層を対象とした機関として活動していくには、幾分もの足りなさが残る。

まして民俗的なことはA市,考古的なことはB市,C 市は美術館とした場合,いろいろな問題を残す結果にな りがちである。また一方では,ある分野の基本資料がド ロップしてしまうことになりかねない。そういう意味に おいて,郷土館から脱皮した新しい地域博物館の誕生が 待たれてきたが,筆者の知る限りにおいては,今もって 少ない。

博物館が陳列場から脱皮し、近代的歴史科学、自然科学の地域センターに徹して活動するなら、あたらいわゆる文化財の数点を並べるより、よほどスタッフと経費もかかるのだが、真の地域社会の理解と研究に役立つのではなかろうか。

また狭義の市域的地域の博物館活動では,真の地域社会の理解に不都合なことが多い. なぜなら,市町村のラインビキが縄文の時代からあったわけではないし,自然

科学の分野においては、限定した場合非常に不都合なことが多い、たとえば、鳥が昼はいるが、夜の寝ぐらは隣の町のこともある。 それと同じように、利用者の地域住民も昼間人口と夜間人口が異なるわけで、このような昼間人口的対応は、地域博物館の建築設計に微妙な影響を与える。

地域博物館は観光地的に利用される展示主体の館と異なり、展示及び教育普及活動を媒体として、地域住民に何度も利用してもらうことがなかったら、中学校を1校建てる位の財政的投資に、住民の理解を得るのはなかなかむずかしいことである.

地域博物館にあっては、県単位の博物館的 に県庁所在地に造るのと異なり、一番利用し やすいところに設置し、山の深い奥地や、交 通の不便な台地のすみっこ的な立地でもまず い. 日常的に使えるところに造ることは、将 来にわたって博物館と住民のパイプを保つこ とができよう.

Ⅲ 建設プランニングのプロセス

博物館造りで一番大切なことは、できるだ

け視覚的データ、図表化したことをもとに進めるべきである。またプロジェクト的に、上下の関係なしに話し合い、討議されていかないと、なかなか実施していけないおそれもある。

また近年どこでも博物館造りというと、展示という概念で展示業者まかせ的な発想も多い。しかし展示により多くの経費を費やすことによって住民の関心を呼ぶのはいいが、展示業者は、決して館の全てを理解しているがごとき錯覚を持ったり、新しく造る博物館の特質までゆだねるようなことがあってはならない。そういう意味では、学者や教育関係者の調査委員会にも、博物館スタッフは指導を受けるが、その運営には大変神経を使うことが多い。特に建築家には十分注意してもらいたい。そうでないと、建物が機能を無視したオブジェになりかねない。

一般的な日本の博物館の建設の形としては、まずたいていは、設計が終わってから準備室ができ、学芸員が採用されるわけだが、筆者の館では、用地とコンペ図面、館基本構想の段階からスタート地点に立てたことと、財政諸般の事情から二転三転し、49年4月開館から51年4月と2年遅れた。このことは博物館の組織造りに役立ち

図 2 平塚市博物館の位置

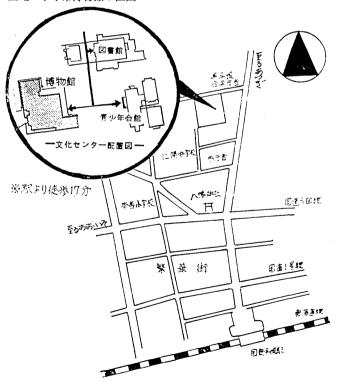
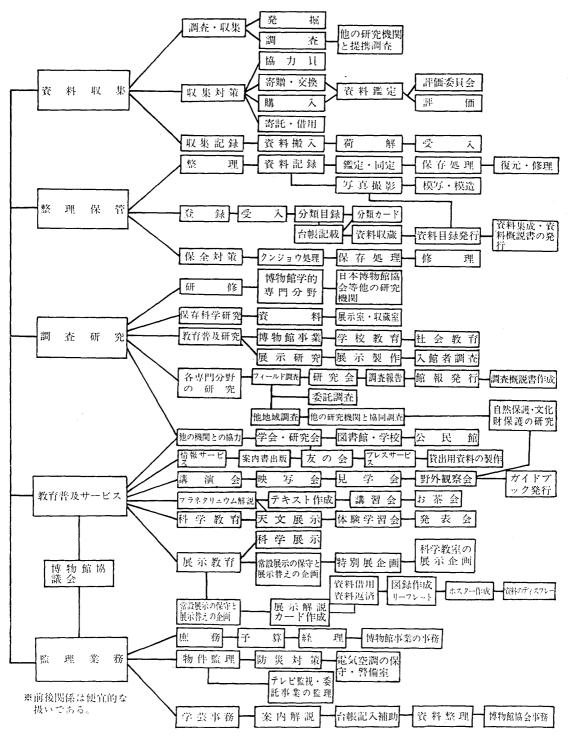


図 3 平塚市博物館の機能図 (小島 1971. 11)



全国でもまれにみる学芸員及び相当職員が開館前に10人 も採用されるに至った。また準備室開室満5年の歳月を 費やして、幾多の努力がやっと実を結ぼうとしているわ けである。

機能図をもとに図示化し、さらにこれから準備する全 体的空間構造を考え、構造図とした.

博物館プロジェクトは3人でスタートしたが,いかに 行政と建築担当及び建築家の理解を得るかに尽きる.

しかも、地域博物館造りにおいて、昭和40年初めにおいては、関東地方においてのモデルとしては、自然史を中心とした横須賀市博物館しかなかった。筆者の館のようなブラネタリウムも併設する多目的総合博物館は皆無であった。現在でも少ない。そのためどんな博物館にするかはプロジェクトの冒険であり、夢の実現あるのみであった。しかし一方で、まとまった調査も200日以上もでき、今後各学芸スタッフが大きく羽ばたく源にもなった。

一方基本設計実施設計も終わってから、昭和48年11月の文部省告示第164号「公立博物館の設置及び運営に関する基準」は今後造られる館の指標になろうが、筆者のプラン造りの基本設計段階では施行されていなかったがほぼ大幅にクリアできた。一方近年のビル火災の死傷事故により、建築基準法の改正や消防法の規制により、施工段階まで大きな制約となった。51年度からさらに一段ときびしくなると聞く。

IV 平塚市博物館の構想

1. 建設の趣旨

本市は神奈川県のほぼ中央南部に位置し、現在の 市域のほとんどは沖積地の上に開けた砂丘地帯であ る.

こうした地形から、かなり古い時代からすでに街 道に沿っていたようである。特に江戸幕府によって 伝馬制度が確立された際には、東海道の一宿駅とし ての形態が整い、これが本市発展の基礎となったと いえよう。

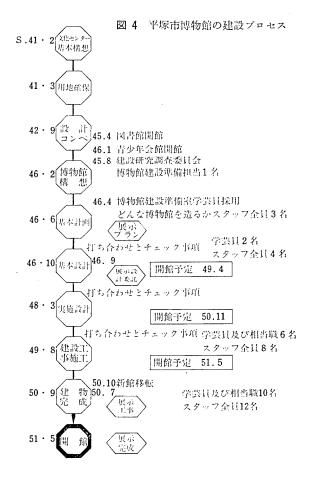
日本の歴史の上からは、本市について特筆すべきものは少ない。したがって、史跡や文化財には比較的恵まれていない。しかし、市民がより価値のある生活を営むことを願い、さらに将来への伸展を期待して、郷土の過去及び現在に何ものかを求める場合必要なものはそのような史跡や文化財のみではなくて、ひろく自然・社会・人文にわたる総合された平塚の姿であろう。

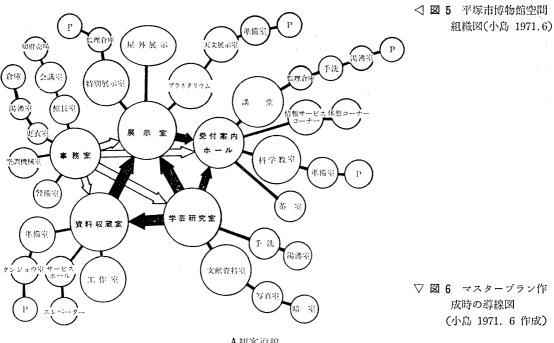
一方,産業技術の高度の発達に伴い、人間の生活までも変革を余儀なくされている。こうした中にあって、市民の教育文化への関心はますます高まりつつあり、文化活動は活発に行われている。

こうした市民にこたえ、市民の教養の場、市民の 憩いの場を提供するために博物館を設置していくも のである.

2. 建設の目的

市民が、自らの生活の場を自然的に、あるいは文 化的に展望することにより、現状を見つめ、将来の 夢を育て、さらに市民としての自覚と誇りを持つこ とを助け、精神的な豊さを得られるような場を提供 し、あわせて望ましい人間形成に資することを目的 とする.





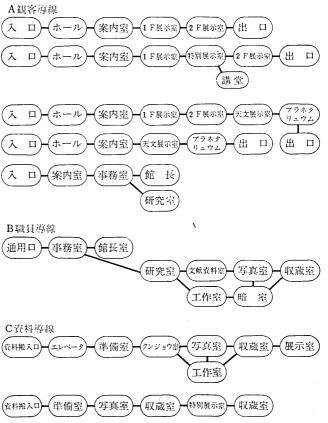
3. 建設の性格

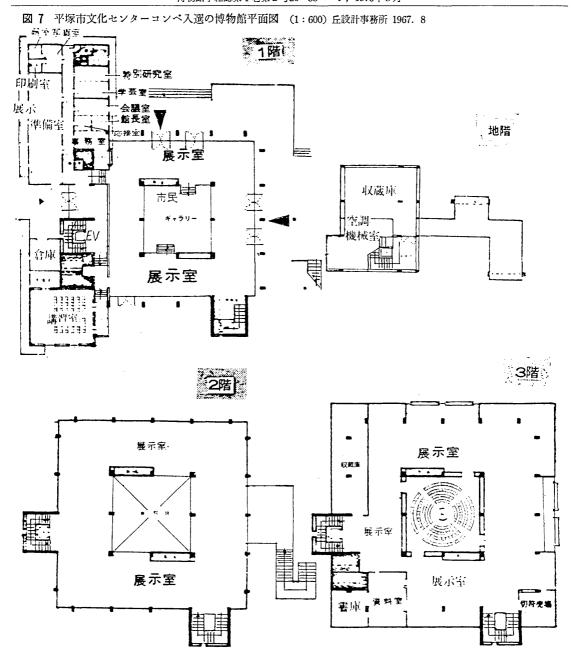
本市をとりまく地域の歴史をさぐり, 現在を明らかにするとともに,将来のく らしと文化を創造する核として,特色の ある地方博物館の性格を持つものであ る。

- (1) 市図書館,県立青少年会館とともに地域文化振興のセンターを形成する.
- (2) 文化財・文化的資料等の収集・保存 ・展示・教育・研究の場としての機能 を持たせる.
- (3) 市民の教養と生活に密着した実物教育機関として、自然・歴史・民俗・美術・科学などの部門を持った総合博物館とする.
- (4) 特に街道関係資料の収集,保存につ とめる.
- (5) 学童の科学教育部門に意を用いる.

V 博物館の設計計画から実施設計へ

平塚市博物館の構造空間は,教育普及空間, 研究空間,保管空間,監理空間に大別される. 教育普及空間においては,特に展示空間の占 める部分が大きく,かつ博物館と市民の接す





る最初の場であり、博物館の顔的性格でもあると考える. また、資料を未来へ残し伝えるため、保管空間の占める割合も大きくとった.

また、これらそれぞれの空間の関係は、単に独立的なものではなく、機能上から密接な複合関係にある.

博物館を建設するにあたっては、基本構想を生かしな

がら、展示との兼ねあいから建築設計を行うことにし、 かつこれらの構造空間の関係を導線上からも考え、設計 を依頼した.

1. 館全体で留意したこと

1) コンペ作品の外観的形態はくずさない ように した.

- 2) 正面入口はすでにある青少年会館と正面し、図書館ピロティーからの導線はメーン導線とし、すでにある樹木をできるだけ残すようにつとめた.
- 3) 通路幅は2.200㎜を限度として確保した.
- 4) メーン階段を観客導線とし、サブ階段を監理階段とした。
- 5) 屋上は天文観測のほか,屋外観察の場として使えるように,サクを設けて公開できるようにした.
- 6) 将来2階の一部約400m²の収蔵室等の増設が可能 なように基礎工事及び電気設備など設計した.
- 7) 身障者の便に留意した.
- 8) 全館 1/3 を展示室として,できるだけ教育普及に 使える室を 1/3,残りを収蔵,研究,学芸空間,監 理空間となるように試みた.
- 9) 展示室・収蔵室等の床の安定率 を 500kg/m² と した.
- 10) 電気・空調関係は地階に集中させ、さらに各階に パッケージ室を付属させた.

展示空間

常設展示室を1階・2階に取り、プラネタリウムは3階にもっていった。この他特別展示室を設け、常設で行われない小特展ができるように、さらに隣接する講堂と一体的に使い、空間として広く使えるように考えた。無窓建築を基本条件とし、経費節約のため手動排煙とし、コンクリート打ちっぱなしを基本とした。特にケース内空調が可能になるように留意。さらに多目的使用にたえるように、ガラス移動が可能となるようにつとめた。

プラネタリウム

- 1) 収容人員120人
- 2) 前室に天文展示コーナを設けた.

研究空間

学芸関連の室との関係から主に3階に配置し、研究室、工作室、写真室、暗室、文献資料室、特別研究室等を考えた。

収蔵整理空間

搬入導線をもとにエレベーター――荷とき及び準備 室――クンジョウ室――工作室――写真室――収蔵 室とした. 搬入口はタラップとし, 3,500mm×2,900 mm 幅のドアをつけた.

エレベーター……資料 搬 入用 と し て 2,000mm×3,000mm, 1,700kgの大型エレベーターとした. そ のため基本設計を変更させた.

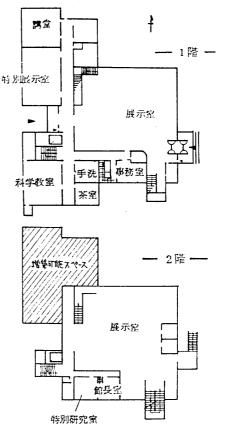
クンジョウ室……資料のクンジョウのため一室を全

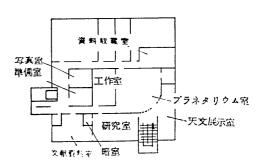
クンジョウできるようにした. 主に山口県博をモデルとした.

収蔵室……資料によって収蔵場所をかえるようにした。そのため1~5室まで分かれ、特に No.1収蔵

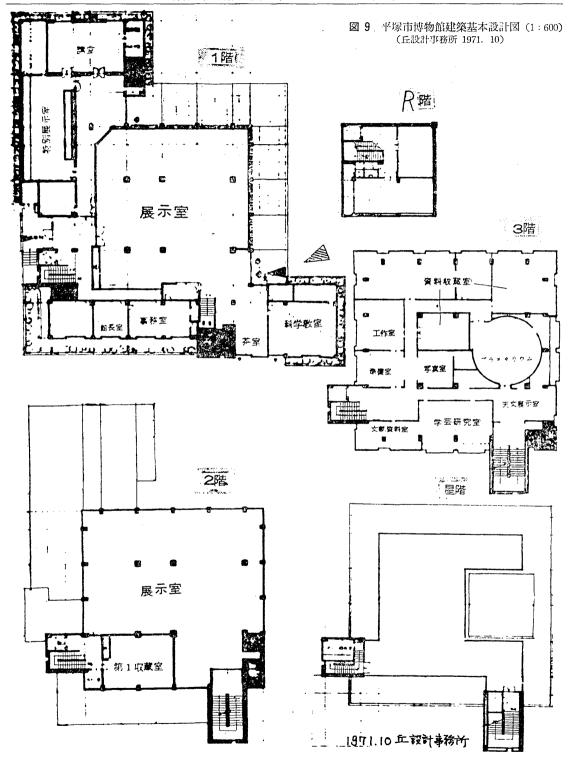
図 8 平塚市博物館建築マスタープラン

※地階は省略 (小島 1971. 6 作成)





- 3 階 -



室は木製の床として恒温恒湿とした. No.2~No.3 も同様である. No.4 は積層式の棚が入り、2倍の スペースに使えるように考えた.

普及空間

講堂……収容人員 100 名を目安として照明, 音響効果に配慮した.

科学教室……いわゆる体験学習を主にしたサイエンスルームで、40名位を限度とした。別に焼物かまどをすえつけた。その他茶室を設けた。

2. マスターから基本設計

コンペ図面の建築家と当初から各室の導線上のことで話し合いが難航した。建築家は7回にわたって図面を変更した。 図 10 平塚市

特に問題となったことは,導線的室 の配置と入口の位置上のことである.

この間まさに互いに理論的に平行線をたどったことは、建築家の博物館へのイメージと、博物館学芸員の機能上のことであり、当館のように限られた空間では導線をあやまると、迷路になりかねないのである.

基本設計において監理関係の1階の 面積をふやし2階から1階へ移動,科 学教室の東側への移動の他は大体マス ターに近い形となった.

地下 1 階地上 3 階 計3,697.92m2

1階 1,564m²

2階 846m²

2 FEI 040II

3階 1,024m²

R 78m² B 1 184m²

> 展示室関係 1,594㎡ 43.9% 収蔵室 465㎡ 13%

基本設計とマスターからかわったこ ととして

- ・サブ導線として特別展示室,講堂 用の出口をとった.
- ・監理部門を1階に集中させた.
- ・科学教室を入口近くにして利用の 便を与えるようになった.
- ・茶室も通常の利用ばかりでなく見 学もできるように1階入口付近に おくことになった.
- ・収蔵室の一部を3階から2階にお

ろした.

3. 基本設計後問題になったこと

館全体としての問題

外装のアルミキャストグリルをどうするか. 財政的 にタイル外壁となる. 1階の講堂,特別展示室,ホ ールの 429㎡ の建設ができるよう基礎を考えたい. 消火装置として炭酸ガス消火装置.

空調関係

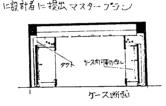
汚染ガス除去としてロールフィルター24時間空調可能として中央監視盤をつけることとしたが、財政上監視盤は中止された.

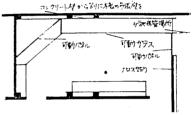
電気関係

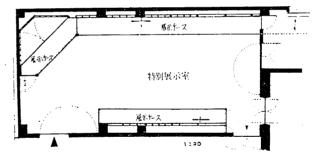
図 10 平塚市博物館特別展示室のマスタープラン(上)と

実施設計(下) (写真は完成した室内)

基本設計後ケースの構造配置:照明等8中心







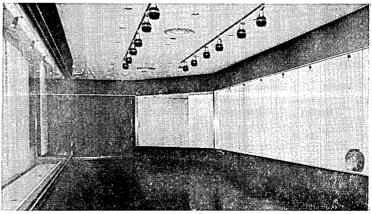
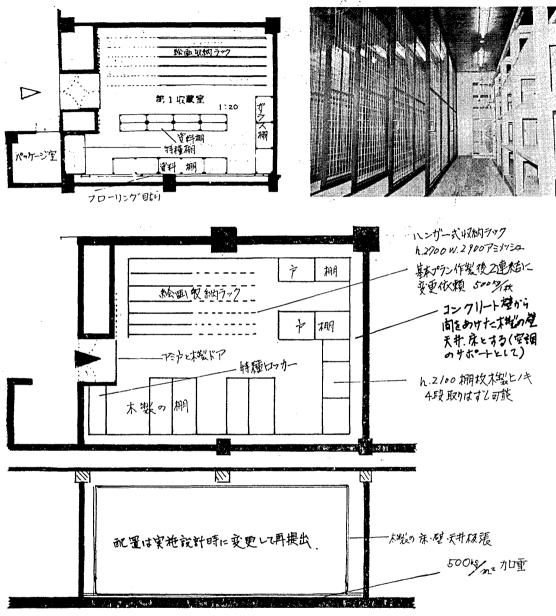


図 11 No.1 収蔵室の計画から実施設計 (上:実施設計図と完成した同室内,下:実施設計検討資料)



特展室の螢光灯に退色防止ランプを使うこと.

昇降機設備

1.8×1.5m750kgのカゴをもっと大きく2,000kg,間 口3m, 奥行2m,高さ3mとしたい.

展示関係

1階展示室有効高を6.5mとること.

2階3.2mとれること.

6 m以上は階段踊場が2か所になってしまうため, 芯芯6 mとし,実質有効約5.3mと実施設計でなった.

1 階

科学教室には焼物のカマドをすえつけられるようダ

クトを考えた.

茶室は春草蘆タイプとすること.

玄関のドアは二重の自動ドアとする.

展示室内のドアの幅3,000m. 高さ3,200mとすること. 搬入口も同じとしたい.

図 12 平塚市博物館実施設計図 (1:600)

特別展示室は二重壁とし、温湿度に配慮すること. 講堂とホールにピクチャーレールを取り 付けること.

搬入口ホール前の柱位置を変更すること.

2 階

丘設計事務所 1973. 3

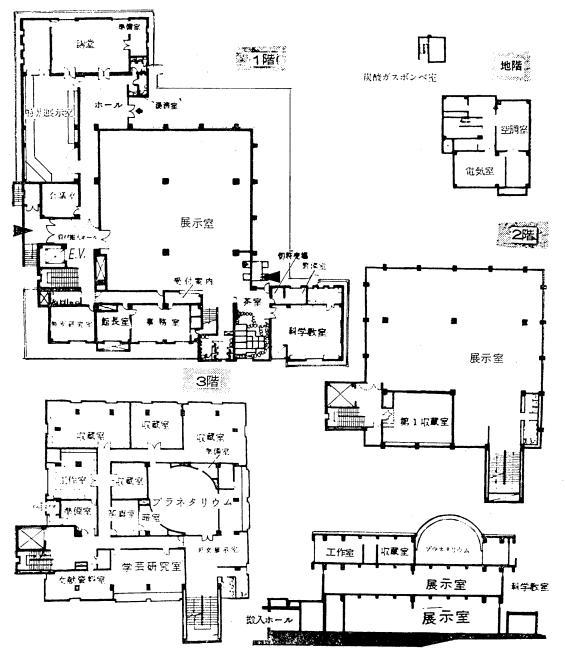
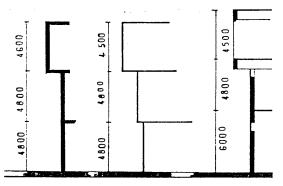


図 13 展示変更に伴う階高の変更



左・マスタープラン 中・基本設計 右・実施設計 展示設計の完了に伴い,1階展示室の階高は6,000 mm に 変更した。

1階・2階の展示室内の天井をメッシュ天井とすること.

収蔵室は木製の床、壁、天井の仕様とし、収納ラックを取り付けるようにすること.

3 階

クンジョウ室の排煙とドアの気密性.工作室は排水, 洗場の設計に留意. 写真室ドアは幅 2,800㎜, 高さ 2,800㎜ 位ほしい. 現像室が不都合なので位置の変 更を. ホール兼天文展示室への配慮としては, 照明 と電気の展示利用のスタンションの確保.

以上の他に各室の準備配置計画をもとに建築工事に伴 うレイアウト配置図を出した. 以上をもとに実施設計を 依頼した. 図 14 身障者便所ができた.

建築基準法の改正により排煙口を1階・2階につけた。

特展室のケースを一部マスターに基づき可動ケース とした.

3 階

プラネタリウムを全体のバランス上中心に寄せ、その分収蔵室を一部狭くした. 収蔵室を消防法上 100 ㎡以下にしたため、No.4 収蔵室は小さく、No.3 を大きくした. また空調系統上 No.3 と No.2 を恒温恒湿とした.

準備室にクンジョウ室をつけた.クンジョウ室の大きさは幅1,510m, 奥行3,680m, 高さ2,700mであるが, 気密性を保つためドアはエアータイトハッチ型とした.また水封栓はじめ各種の機械はすべて部屋の上部へ設置した.ドアのエアータイトの方法は今後検討の余地がある.またガスの注入口の設置場所は変更予定である.試験の結果では気密性は保たれるため使用にたえるクンジョウ室である.

当館でのクンジョウの扱い方は下記のとおりである。系統図は図を参照してほしい。

- ・クンジョウ開始
- 1) 給水バルブ①を開く.
- 2) 水封箱④が満水となるとオーバーフローが始まる. オーバーフロー管③に水の流出を確認して①の給水バルブを閉める.
- 3) ガスを流入して放置する.

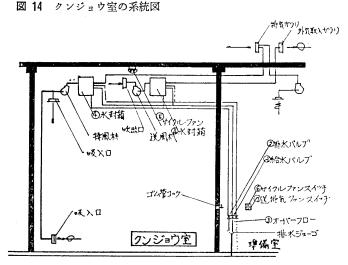
4. 実施設計

建物全体にかかわること

- 1) 樹木保存のため位置を変更したこと.
- 2) 鉄筋コンクリート造り3階建を鉄骨にし、階高を14,700mm(1階4,800mm,2 階4,800mm,3階4,500mm)を15,900mm(1 階6,000mm,2階4,800mm,3階4,500mm)とした。
- 3) 展示ジオラマ用に床の一部 を 1,200mm 掘り下げた.
- 4) 各階に収蔵室を中心にパッケージ室を つけたこと.

1 階

入口ドアを二重ドアにした. エレベーターを幅2,000m×奥行3,000m 積載量1,700kg にした.



※問題点 クンジョウ室はガスもれの危険上ドアをエアータイトの構造とし, ハッチドアとした。ガス注入口のコック取付は改良中である。

表 1 平塚市博物館の施設内訳

| 1. | 室名 | 面積 | | | |
|---------------------|-------------------|-----------|-------------------|-------------|---|
| 1. | | (m²) | % | 面 積 (m²) | % |
| 1 1 | ①展示室 | 1,084 | 29.8 | | 29.9 |
| 展施 | ②特別展示室 | 150 | 4.2 | | 3.8 |
| 示設 | ③プラネタリウム | 144 | 4.1 | 127 | 3.2 |
| に必 | ④天文展示室 | 44.8 | 1.3 | 81 | 2.1 |
| 要な | ät | 1, 422.8 | 39.1 | 1,529 | 38.9 |
| 2. | ①研究室 | 90 | 2.5 | 79 | 2.0 |
| 研 | ②特別研究室 | 36 | 1.0 | 40 | 1.0 |
| 究 | ③文献資料室 | 50.3 | 1.4 | 46 | 1.2 |
| に必 | ④工作室 | 60 | 1.7 | 62 | 1.6 |
| 要 | ⑤写真室 | 30 | 0.8 | 26 | 0.7 |
| な施 | ⑥暗室 | 10.5 | 0.3 | 14 | 0.4 |
| 設 | 計 | 276.8 | 7.8 | 267 | 6.8 |
| 3. | ①収蔵室 | 386 | 10.1 | 377 | 9.6 |
| 保 | ②準備室 | 30 | 0.8 | 29 | 0.7 |
| 管 | ③資料搬入用エレ | 12 | 0.3 | | |
| 必必 | ベーター ④クンジョウ室 | 7 | 0.2 | 7 | 0.2 |
| に必要な | ⑤資料搬入ホール | 28 | 0.8 | 28 | 1.6 |
| が施設 | 計 | 463 | 12.7 | 476 | 12.1 |
| | ①館長室 | 30 | 0.8 | 29 | 0.7 |
| 4. | ②事務室 | 41 | 1.2 | 56 | 1.4 |
| | ③警備室 ④更衣室 | 13.5 | $0.4 \\ 1.2$ | 16 6 | $0.4 \\ 0.2$ |
| 監 | ⑤監理倉庫 | 43 | 1.2 | 45 | 1.7 |
| 理に | ⑥電気室 ⑦空調室(各階に | 75 | 2.1 | 54 | 1.4 |
| 必要 | 20㎡のユニット | 50 | 1.4 | 48 | 1.2 |
| 75 | 方式をとる) ⑧控室・会議室 | 36 | 1.0 | 34 | 0.9 |
| 施設 | ⑨その他 | | | 194 | 7.9 |
| | 計 | 294.5 | 8.3 | 482 | 12.3 |
| 5. | ①茶室 ②講堂 | 36 100 | $\frac{1.0}{2.8}$ | | $\frac{1.2}{2.7}$ |
| 普 | ③受付案内 | 12 | 0.3 | 12 | 0.3 |
| 及 | ④休憩室 | 36 | 1.0 | 0 | 0 |
| 教育 | ⑤玄関ホール ⑥科学教室 | 51 120 | $\frac{1.4}{3.4}$ | 79 100 | $\begin{array}{c} 2.0 \\ 2.6 \end{array}$ |
| に必 | ⑦準備室 | 21 | 0.6 | 15 | 0.4 |
| 必 | ⑧手洗室(各階で 5か所) | 103 | 2.9 | 81 | 2.1 |
| 要な施 | 5か所) | 9 | 0.3 | 3 | 0.1 |
| 施設 | 計 | 488 | 13.8 | 444 | 11.3 |
| 6. | | | | | |
| そ他の | | 706 | 20 | 729 | 18.6 |
| 総 床 面 積 3,637 3,927 | | | | | |

- 4) 同時に⑥のスイッチを入れ,天井サイクルファンを始動してガスの分布を均一にして流入後に停止.
- クンジョウ終了
- 1) 排水バルブ②を開き、水封箱④の水を排水する。
- 2) 排水完了を確認後排水バルブ②を閉める.
- 3) ⑥⑦のスイッチを入れ、サイクルファン送風 機排風機を始動してクンジョウ室内のガスを排 出する.
- 4) 数時間後屋上排気ガラリよりの排出空気を調べてガスの完全排出を調べた後,送風機排風機サイクルファンを停止して完了.

電 気

将来の増設約430㎡に対応できること.

5. 設計後施工まで

実施設計のチェック事項

- 1 階
- ・切符売場をつけるようにする.
- ・全体の配置の移動.
- ・特展室, 講堂, ホールに 1¹/₄ インチの絵画用パイプをつける.
- ・特展室のケース内のパネルを可動とした 図 を 出す.
- 可動バックパネルをつける.
- 2 階

収蔵室絵画収納ラックを2連結とし、収蔵棚のレイアウトと大きさを最終的に決定した.

3 階

写真室の入口と内部変更図の提出.

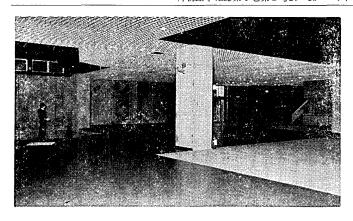
以上のことを配慮して入札時においてさらに財政的問題から常設展示室のケース内空調やNo.2~No.5 までの収蔵室の棚は建築工事から除いた.

また,施工において細部的な打ち合わせを行いながら, 施工者,建築担当者,博物館の意見,設計者側の意見も 入れて施工完成した.

VI 建築プランニングのこれから

今までとかく博物館を工芸・美術中心に考え、大型の 物質文化資料をもとにした館は非常に少なかった.

一方建築家もとかく博物館というと展示室をつくるだけで、他の収蔵関係、研究、普及活動に必要な室の設計は全く考えもしないでできたきらいが多い。そのため、この5年間はまさに悪戦苦闘の連続であった。しかし、



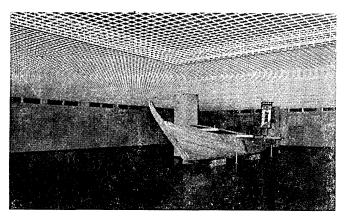


図 15 展示前の展示室 上:1階展示室,下:2階展示室

このようなことも今後の地域博物館のたたき台になれた ら幸いである.

平塚市博物館は約150㎡ 程のプレハブ2棟を収蔵室として使ってきた. 準備段階に収蔵室及び整理室は不可欠である. またこの中の1棟は建築面積の関係上1階に未整理資料の保管場所がとれなかったので併設予定となっている.

展示室は展示計画から問題となったのだが、500㎡ 前後の空間としてはフロアー単位として正方形では半端であるので800㎡と300㎡位に分けた室か,思い切って1,000㎡位の室が1室の方が、展示以外の空間の無駄や、導線上処理しやすいようである。

1. これから造る博物館に対するアドバイス

空間的問題では展示及び普及空間と、学芸中心の空間は分離した方式の方がもっとゆったりと 使 え そ う だ. 独立棟として併列するほうがさらに良いだろう. プラネタリウムはできるだけ 1 階に設置した方が使い

やすそうだ.

また設計上の留意点としては、建築設計 家の設計した図面をよく読みとること、問題点は必ずチェック事項として相手方に伝 わる形で書類で残すこと、施工時において も現場によく通い、施工上のとりあい関係 をよく吟味した方がいい。そうでないと電気は電気、建築は建築という形で、あとで 致命的な空間ができる場合もあり得る。

また各地にできた博物館も展示室を見るだけではなく、全体的な機能空間や、建物の仕上がり等の角度からもとらえておくことが必要であろう。直接博物館建設に携わったスタッフからの意見の拝聴もきっと役立つに違いない。

2. 建築基準法と消防法上配慮したこと

実施設計及び施工時においては次のよう なことが主要な点である.

①1,500㎡以上の建物は排煙装置が必要である。平塚市博物館では財政上自動排煙をやめ、手動とした。手動のため床面積の1/50以上の閉口部を外壁に面してランマ状に取りつけた。

②収蔵室など人の常時いない室では、100㎡以下の場合不燃材を使うと排煙窓は不用である。そのため収蔵室は当初の計画を一部変更し、すべて100㎡以下とした。

③避難進入口…… 3階以上の建物で広場及び道路に面している室は、火災時には消防隊の突入口として10m以内に1か所の進入口を設けなければならない。 そのため 3階の収蔵室にもすべて窓をつけざるを得なかった。

④資料の保全のため特別展示室及び収蔵室はすべて炭酸ガス消火装置を取り付けた.

⑤主要な開口部ドアはすべて自動防火ドア・シャッターが義務付けられている.

VII 最後に

詳細な各室の配慮は紙面の都合により割愛した.しかし、博物館が成功したかどうかは、建築的なことよりも、予算に裏付けられた運営のいかんにあるわけである.今後はこの面で地域住民といままで以上に深く結ばれ、地域文化の発展なるなら、当初の目的は達成されるであろう.そのために担当スタッフ12人一丸となって開

館せざるを得ない. 経済情勢上やむを得ないことでもある.

しかも、この間プロジェクトの同志を2人も失った. 特にこの建築プランニングにあたって常に一緒に考えて くれた前室長島崎康信氏を追悼する意味で以上の経過を 整理した次第である.

また建築設計プランニングにあたっては、当準備室学芸員村山昇氏の多大な協力があったことを記したい。さらにこの経過立案を常に温かく見守ってくれた前教育長加藤文八・国学院大学樋口清之両先生に厚く感謝する次第である。また今回の投稿を許可いただいた博物館建設準備室長菅間荘氏に感謝する次第である。

(こじま・ひろよし=平塚市博物館) *Hiratsuka City Museum

参考文献

- 1. 平塚市博物館建設準備室『博物館通信』各号
- 3. ポー 未刊『展示シナリオ書』(1974年)
- 4. 拙稿「北欧の物質文化博物館」『神奈川県博物館協会報』 34号(1976年)
- 5. ICOM『博物館組織』(1965年)
- 6. 河合正一「博物館・美術館」『建築学大系34』(1961 年 彰国社)
- 7. 河合正一他「博物館・美術館」『建築設計資料集成4』(1965年 丸善株式会社)

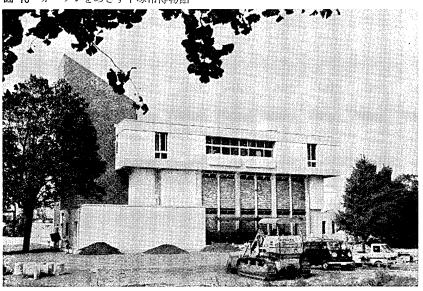


図 16 オープンをめざす平塚市博物館